# ワーズワスの田園詩　（その１）

黒　岩　忠　義

Wordsworth's Pastorals (1)

Tadayoshi KUROIWA

## 一

『抒情民謡集』第二版（一八〇〇年）（*Lyrical Ballads*, 1800）[1] にはPastoralの副題をもつ詩編が五編見られる。さらに、これより後に書かれた一八〇四年の日付けのあるもう一編のPastoral（おそらく、この詩は一八〇二年に書かれたと推定されるが）[2] を合わせると六編書かれたことになる。そしてこれらのPastoralの世界はいずれも、彼が少年時代を過ごしたCumberlandとWestmorelandにまたがる湖水地方を舞台としていて、Theocritus（C. 308-C. 240 B. C.）がその牧歌*Idylls*の舞台を、彼の故郷Sicily島を背景として描いているのに酷似する。しかし、Wordsworthが描くPastoralの世界は、元来Theocritusに始まりPublius Vergilius Malo（70-19 B. C.）を経て、古代の詩人たちに受け継がれた牧歌の伝統や、それとの関連で歌われたEdmund Spenser（1552？-99），William Shakespeare（1564-1616）が描くPastoralの場面とは一線を画している。このことは、『序曲』第八巻（*Prelude*, 1805. V111.）のなかですでに明らかにされている。それによると、「牧人こそ、はじめて私［ワーズワス］を喜ばす人間であった」（"And Sheperds were the men who pleased me first."）（*Prelude*, 1805. Ⅷ, 1. 182.）が、彼が関心を持つ牧人は、

Arcadiaの城砦の中に大切に守られて、
あの古代の　詩人たちが歌ったように、黄金時代として、
彼らの間に受け継がれてきたものでもなければ、
また、これらに関連した第二の子孫として、かのShakespeareが、
Ardenの森の中に描き、そこでPhoebeが偽のGanymedeに
向かってため息をつく場面とか、あるいはFlorizelとPerditaとが
祭の日の女王と国王の役になって、一緒に舞踏に　興じる場面に
あらわれるようなものたちでもない。また、
Spenserが描いたような人たちでもない。
（Not such as in Arcadian fastnesses
Sequestered, handed down among themselves,
So ancient poets sing, the golden age;
Nor such, a second race, allied to these,

As Shakespeare in the wood of Arden placed
Where Phoebe sighed for the false Ganymede,
Or there where Florizel and Perdita
Together danced, Queen of the feast, and King;
Not such as Spenser fabled. (*Prelude*, 1805. V111, 11. 183-191)

このようにして、実際にWordsworthが描く羊飼いはその田園での生活様式が「厳しく、飾り気のない、また僅かだが実質的に必要なものにのみ心を配る生活の簡素な産物」("the rural custom／And manners... were severe and unadorned,／The unluxuriant produce of a life／Intent on little but substantial needs") (*Prelude*, 1805. Ⅷ, 11. 205-209) としての人々であり、彼らこそWords－worthにとっては「美しい存在であり、またそのように感じられた」("Yet beautiful, and beauty that was felt.") (*Prelude*, Ⅷ. 1. 210) のであった。つまり、彼の心を強くとらえたものは「危険、悲しみ、また、苦しみといったイメージ、おそるべき力と形象とに囲まれて苦悩する人々」("But images of danger and distress,／And suffering,…／Man suffering among awful Powers and Forms ;") (*Prelude*, 1805. Ⅷ. 11. 211-13) であったと言うのである。そこで、Wordsworthはそのような人々の例として少年時代に下宿の賄い老婦人Mrs. Tysonから、たまたま聞いた羊飼いLukeの話 (*Prelude*, 1805. Ⅷ, 11. 222-311) を『メイトロン婦人の物語』("Mrs. Matron's Tale") として『序曲』第八巻に挿入している。

この物語は最初は、『抒情民謡集』第二版（一八〇〇年）の第二巻に発表された『マイケル、－田園詩』（一八〇〇年）(*Michael* – a Pastoral Poem, 1800) の一部として書かれたものであった。しかし、それは「不釣り合いに長くなったために削除され」[3]、のちに『序曲』（一八〇五年）に挿入されたのである。その＜老婦人＞の語る物語とは行方がわからなくなった一頭の小羊を探す父子の物語である。話は次のように始まっている。

初雪がちらつき始めたある日のこと、
羊飼いとその息子は群れからはぐれた一匹の小羊を
探しに出かけた（このように、メイトロン婦人の話は
始まるのだが)。二人はその前の日も同じように、
自分の牧場や他の場所をくまなく捜したのであった。
(At the first falling of autumnal snow
A Shepherd and his Son one day went forth
(Thus did the Matron's Tale begin) to seek
A straggler of their flock.) (*Prelude*, 1805. Ⅷ, 11. 222-5)

そして、その羊飼い父子は二人で、近辺の山々や谷や崖はもちろんのこと、遠くFairfieldのいちばん高い峰や、Helvellynの峰に上り、見渡せる限りの谷間や山陰をも見渡すが見つからない。その日も絶望の思い深く、父は諦めて一足先に帰宅したのであった。しかし息子は父の同意を得て、もと捜した場所に引き返し、ふと思い当たった場所をたどったのである。と言うのは、そこは昔から羊達が特権のように使っていた場所であったからである。少年は川の深い流れの水際まで降りてくると、急に山頂から降り始めた土砂降りの雨に、三時間もたたられながら、その間も捜索を続ける。果たせるかな、少年はその川の中州の、わずかな草むらに取り残された子羊を見つけたのである。そこは岸から離れた水の深いところで、人も動物もめったに行かない、しかも、まわりは断崖が切り立ったところであった。つまり、「その勇敢で、冒険野郎の子羊は空腹のあまり、たった一人でそのわずかな緑の草地めがけて、突進していた」（“this one adventurer, hunger - pressed, ／Had left his fellows, and made his way alone／To the green plot of pasture in the brook.”（*Prelude*, 1805. Ⅷ, 11. 275-7）と言うのである。そこで、少年は喜びの余り、よく見きはめもせず、そこへ跳びうつる。すると、子羊はその瞬間、向こう岸めがけて身を踊らせ、逆巻く急流に巻き込まれてしまう。このさまを見て、驚いた＜少年＞は恐怖の余り、度を失い、その怒濤の上を飛び越えて、戻るだけの勇気もない。日暮れも迫り、今度は息子の身の上を案じた父親は息子の捜索に出かける。やがて、父親は急流逆巻く奔流の真ん中にとり残された倅の姿をみたのである。この出来事を、詩人は

> 「なんびとも悲しみと恐怖なしには目を向けることができない光景」
> （“The sight was such as no one could have seen／Without
> distress and fear.”）（*Prelude*, 1805. Ⅷ, 11. 307-8）

と記している。そこで父親は声を限りに絶叫するわが子に杖をさしのべ、跳ぶように命じ、＜無事に息子を腕の中に取り戻すことができた＞と言うのである。この話は極めて平凡ではあるが、感動的な父子愛の物語である。

このようにして、そのような「素朴で粗野な」（“homely and rude,” *Micheal*, 1 .36）話に導かれ、少年Wordsworthは郷里の羊飼いたちに見られる農民の生活や習慣に強く心を惹かれていったのである。

## 二

『抒情民謡集』第二版（一八〇〇）に発表された五つの田園詩は、『樫とえにしだ』“The Oak and Broom”,『のんきな羊飼いの少年たち』“The Idle Shepherd - Boys”,『手飼いの子羊』“The Pet - Lamb”,『兄弟たち』“The Brothers”,『マイケル』“Michael”である。さらに、一八〇四年には『後悔、一田園詩の物語』“Repentance : A Pastoral Ballad”が書かれている。

しかしながら、これらの田園詩のなかでも、『マイケル』と『兄弟達』の二つの作品だけが、そこに描かれた羊飼いたちの思考や感情に読者の共感を促す、厳粛な場面を描いたものである。そして、Wordsworthは、『兄弟たち』を「これらの一連の田園詩の結びの詩」であると位置づけ、「兄弟たち』への自注に次のように記している。

> 「この詩は一連の田園詩の結びの詩としてつくられたものである。これらの詩の背景は、CumberlandとWestmorelandの山中である。此の詩の書き出しが唐突である申しわけとして右のことを記す次第である。」
> (“This Poem was intended to be the concluding poem of a series of pastorals, the scene of which was laid among the mountains of Cumberland and Westmoreland. I mention this to apologize for the abruptness with which the poem begins.”)[4]

しかし、Stephen Parrishによれば、“Michael”もまた、Wordsworthは一連の田園詩の中で、完結した田園詩と考えていたのである[5]。要するに、この二つの詩をWordsworthは、読者を新たな感情と思考の発見という営みに導く、詩人としての真摯な目的にもっとも応しいものとして考えていたのである。何故なら、この二つの詩はそこに描かれた羊飼いたちの思考や感情と、詩人の感情との主観的合一にもとづいて書かれたものと思われるからである。また、Pastoralの副題をもつ、他の小品にも、この二つの詩のなかでとりあげられたPastoral的要素をいくらか見ることができるのである。なかでも、とくに重要なことは、想像力の影響のもとに自然と調和して生きる素朴な人々は、幸せで平穏な生活を享受することができるという、Wordsworth固有の田園詩の信条がそこに見られるからである。

例えば、『手飼いの子羊』は囲いの子羊と幼い少女との純粋な関わりと愛情の描写である。詩人はその幼い少女と子羊との魅惑的光景に魅せられ、思わず次の歌を口ずさむ。

　　のんきに小道を辿り、家路を辿りながら、

此の歌をときどき繰り返してみた。そして、
歌詞を一行一行なぞって気がつくことは、
それは、半分は少女の歌で、半分はわたしの歌詞の
ように思えたのであった。
（－As homeward through the lane I went with lazy feet,
This song to myself did I oftentimes repeat,
And it seem'd, as I retrac'd the ballad line by line
That but half of it was hers, and one half of it was mine. (11.61-64)

また、『のんきな羊飼いの少年たち』は自分の仕事をはなれて、休息と遊びに、気ままに興ずる二人の若者の、幸せで屈託のない世界の描写なのである。しかし、この詩の力点は、そののんきな若者達が彼らの不注意により、川に落ちた手飼いの子羊の救出失敗にある。

子羊はすべって川に落ちたが、
幸いかすり傷も、怪我もなく
急流が子羊をこの深い淵へと運んできたのだった。
母羊はその子羊が落ちるのを見ていたのだ、
また、急流に運ばれてゆくのを。
母羊はその切ない思いをこめて、
崖の岩の上から哀れな鳴き声で泣いたとき、
その子羊はなおも、淵を泳ぎまわって
そのうら悲しい声に答えていた。
（The Lamb had slipp'd into the stream,
And safe without a bruise or wound
The Cataract had borne him down
Into the gulph profound.
His dam had seen him when he fell,
She saw him down the torrent borne ;
And while with all a mother's love
She from the lofty rocks above
Sent forth a cry forlorn,
The Lamb, still swimming round and round
Made answer to that plaintive sound.）(11.67-77)

しかしながら、その子羊は幸運にもそこを通り合わせたうたびとによって無事助け出され、若者達はつぎのように勤勉を促されてこの詩は終わっている。

うたびとはものしずかに、
そののんきな羊飼いたちに
忠告した。もっと仕事に励むようにと。
（And gently did the Bard
Those idle Sheperd-boys upbraid,
And bade them better mind their trade.）（11.97-99）

次に、『樫とえにしだ』はEdmund Spenserの『羊飼いの暦』の「二月」のなかで歌われた「樫と野バラ」を想起させるイソップ風の教訓的物語である。「樫と野バラ」では、年老いた羊飼、シーノ（Thenot）の姿を借りて、老齢者のことが語られている。この老人は腰が曲がり、老いぼれているので、意地の悪い牛飼いの若者カディ（Cuddie）に嘲笑される。しかし、その老人の恩恵をうけて幸せな暮らしをしてきたカディは、その嘲笑の対象としてきた老人の亡き後になって、はじめて、寂寥たる悲哀感に襲われ、悲しい運命を辿ることになる。しかし、Wordsworthの『樫とえにしだ』は森や山ふところ深く分け入った羊飼いたちの間に伝わる話として語られ、羊飼Andrewは自然から素朴な真実を知ることになる。かつて、突風吹きすさぶ山の頂上で、＜えにしだ＞は頑丈な＜樫の木＞の下に庇護されて生えていた。しかし、日頃、その＜えにしだ＞に高慢にも恩を売ってきた頑丈な＜樫＞が、或る日突然、突風に根こそぎにされて吹き飛び、それとは逆に、ひ弱ではあるが自然の運命に順応して生きてきた＜えにしだ＞は皮肉にも、嵐を無事乗り切って生き残り、その後は、ゆったり余生を送ったと言う話である。しかして、羊飼いAndrewは同じく次のような教訓を、自然の営みから得てこの話は終わっている。

我々の生存を維持している絆は
我らの老若、賢愚、強弱を問わず、
真に脆いものなのです。
（Frail is the bond by which we hold
Our being, be we young or old,
Wise, foolish, weak or strong.）（11.58-60）

しかしながら、『後悔、一田園詩の物語』は、当時、野畑を守るために朝は五時から機をまわし、糸を紡ぐ空しい努力のなかで疲れはてた、Wordsworth一家の近くに住むAshburners一家の出来事に基づいている。この詩は『兄弟たち』や『マイケル』と同じく、私有財産の所有が田舎の人々の

自立と、精神的、情緒的幸せに果たす役割を力説したものである。Allanと彼の妻はただの強欲だけから彼らの野畑を売り払う。しかし、その結果、彼らが知るにいたったことは、それまでに所有してきた財産とも、またそれとの関わりのなかで享受してきた、幸せで平穏な生活とも、まったく無縁の存在となり果てるに至った話である。

今、われ家にとどまり、歩くさまは蝸牛のごとし。
そして、われら、いま、この谷間に土地はなく、
ただあるのは、祖先の眠る六フィートの土地のみ。
そして、そのような思いの後につづくため息もて、
しばしば、聞くは教会の鐘なり。
（Now I cleave to the house, and am dull as a snail ;
And ofentimes, hear the church - bell with a sigh,
That follows the thought — We've no land in the vale,
Save six feet of earth where our fore - fathers lie ! ）（11. 33-36）

## 三

しかし、『マイケル　—　田園詩』と『兄弟達』のこの二つの詩は、一連の田園詩のなかでは、とりわけ本格的なPastoralとして書かれ、家族愛と自立に必要な私有財産の問題をとりあげ、その緊密な関連を描いたものである。前者『マイケル』に関して、詩人はその主旨をThomas Poole（1765-1837）宛の手紙のなかで次のように記している。

「わたしの第二巻の最後の詩で私が描こうとしたのは、強い精神と活発な感受性の持ち主が、二つのもっとも強力な心情に揺さぶられる姿である。一つは子供に対する両親の愛であり、もう一つは財産、特に土地に対する愛着であって、その中には遺産、家庭、個人、及び家族の自立を含むさまざまな感情が含まれる。」（"In the last Poem of my 2nd Volu. I have attempted to give a picture of a man, of strong mind and lovely sensibility, agitated by two of the most powerful affections of the human heart ; the parental affection, and the love of property, *landed* property, including the feelings of inheritance, home, and personal and family independence."）[6)]

勿論、「最後の詩」とは本詩『マイケル』のことであるが、この詩のなかで詩人は人間愛のなかでも、二つのもっとも強力な愛情、つまり遺産と家庭、及び個人と家族の自立に対する感情をも含む、両親の子供への愛と、土地、財産に対する愛によって揺さぶられる、強い精神力と活発な感性の持ち

主を描こうとしたのであった。

本詩の主人公、MichaelはGrasmereの人里離れた秘境（'hiddden valley'）（*Michael*, 1.8.）の谷間に住む年老いた羊飼いであったが、強い精神力、手足は強靱で、体格は若い頃から老年の今に至るまで、人並み以上に強健、心は鋭敏で、熱烈、また質素で何事にも向き、特に牧羊の生業にかけては並外れて用心深く、いつも岩間を駆け行き、風に耳を傾け、太陽を見上げ、羊の世話やわずかな家の土地の世話まで、あらゆる種類の仕事に励む勤勉で優しい老人であった。(11. 40-61)。Michaelは八十歳の老齢に達していたが彼には二十も違う見目麗しい、「働き者」（"a woman of stirring life"）（1.83）である妻Isabelと、それに、可愛い一人息子Lukeと、どんな嵐にも鍛えられた二匹の勇敢な犬がいたのである。一方、働き者の妻は二台の糸車をもち、一台が休んでいるときは、もう一台が動いていたと言うのでらるから、勤勉なMichael老人に相応わしい妻であった。夕食のあとも夜なべに精を出す一家の灯は、たまたまMichael一家の家がその一帯を見渡す山の中腹にあったために、いつのまにか近隣の人々からは勤勉の象徴として「宵の明星」（"The Evewning Star"）（1.146）と呼ばれるほどであった。

また一人息子のLukeは牧人Michaelにとって立派な跡継ぎを意味するが、牧人たちの言葉で言えば「棺桶に片足をつっこんだ年齢」（"with one foot in the grave", 1.92）になってから生まれたと言うのである。したがって、「かけがえのない宝物」として育てられたのである。つまり、Michaelは長年連れ添った妻を愛しただけではない。我々は、年老いてから生まれた息子に対する格別の愛情を、次の描写にみることができる。

厳しい頑固な心の持ち主でありながらも、
畑で働いているとき、または、家の玄関近くに
一本立っている大きな古い樫の下で、縛った羊を
前に寝かして羊飼いの腰掛けに座っているとき、
（マイケル）は幼い息子を目に届くところに置きたがった。
(Albeit of a stern unbending mind,
To have the Young - one in his sight, when he
Had work by his own door, or when he sate
With sheep before on his Shepherd's stool,
Beneath that large Old oak, which near their door
Stood, . . . ) (11. 171-176)

また、老人Michaelにとって息子というものは、もしもの時は生の継承への希望であるが、特に

一人息子のLukeは何にもまして、老い行くMichaelに与えられた「希望と将来への期待」（“hope and forward looking thoughts”）（11. 155.）でもあったのである。従って、Michael老人は「暇つぶしや、楽しみのためでなく、忍耐強く、優し行為に駆り立てられ、しばしば女のするような優しい手つきでゆりかごを動かした」（163-167）と言うのである。従って、Michael老人はそのような細やかな「愛情の行為」（“acts of tenderness”）（167）に、己の生を継承してくれるもう一つの生＝分身をLukeに見ているのである。

しかるに、Wordsworthが本詩の中で描くところの、そのように堅実でほほえましい家族愛と勤勉の背景には、当時の賃金と生活費との増大する不均衡、産業の拡大と重税化、また貧民救済施設と工場の拡大などとともに、貧民の間における家族愛の絆の弱体化と崩壊などがあったのである。このことは、Charles James Fox（1749-1806）宛の詩人の手紙（一八〇一年一月一四日付）から知ることが出来る。

> 「最も悲惨な結末は社会の低い階級の間に見られる家庭的愛情の急速な衰退であるように思われます。この結末をこの国の現在の支配者たちは気づいていないか、または、無視しています。過去何年もの間、ヨーロッパの殆ど全ての国々の社会の傾向はこのような悲惨な結果を生み出す方向にあります。… 貧民達の間における家庭的感情の絆は弱体化し、…数えきれない例において、全く破壊されてきているのです。」（傍点筆者）
>
> （“It appears to me that the most calamitous effect. . . . is *a rapid decay of domestic affections among the lower odrers of society.* This effect the present Rulers of this Country are not conscious of, or they disregard it. For many years past, the tendency of society amongst almost all the nations of Europe has been to produce it. . . . *the bonds of domestic feeling among the poor, . . . have been weakened, and in innumerable instances entirely destroyed.*”）[7] （Italics Mine）

そこで、そのように勤勉で誠実なMichael一家も突然「悲しい知らせ」（“Distressful tidings”, 1.199.）に襲われるのである。もともと、裕福で勤勉であった甥は、どのような不幸に遭遇したのかは不明だが、「思いがけない不幸」（“unforeseen misfortunes”）（1.223）に陥っていたのである。そこで、甥の保証人になっていたMichaelはその負債を負わされ、その額は彼の資産の半分に近い。従って、老人は「どんな老人も思いつかないほどの希望」を奪われた（“more hope out of his life than he supposed that any old man ever could have lost”）（11. 229）のは当然のことであった。しかし、老人はその難事に対処すべく、勇気を取り戻しその父祖伝来の財産の一部を売ることにするが、その決意は二日後には崩れる。彼の苦悩と父祖伝来の遺産への愛着は、

「だが、もしこの土地が
見知らぬ人の手に渡るならば、わしは死んでも
墓場で安らかに眠れそうにないと思うのだ。」（傍点筆者）
（　　‥, "yet if these fields of ours
Sould pass into a Stranger's hand, *I think*
*That I could not lie quiet in my grave.*"）（11. 240-242）（Italics Mine）

と言う言葉に見られる。そこで、Michaelは土地を手放さないで抵当を抜くために一人息子Lukeを出稼ぎに大都市Londonに行かせることにする。と言うのは、かつて貧乏で、教会の世話になっていたRichard Baitman（実はRobert Baitmanのこと）がLondonに出て行って大金持ちになり、故郷に大理石の教会を寄付したことをMichaelは思いだしたからである。そこで、Michaelはその計画に「失ったものを償うに余る希望」（"far more than we have lost"）（1.286）を息子に託し出発させることにするのである。

しかし、出発に先立ち、MichaelはLukeが生まれる前から深い谷間の小川のそばに、かねてから手がけていた「羊囲い」の「石の塚」（"the heap of stones"）（1.337.）へと彼を案内し、自らの手で「隅石」（corner - stone"）（414）を一つ置くように命ずる。この「石塚」はMichaelにとっては継続中の仕事を意味し、そこを流れる「騒々しい川」（"the tumultuous brook"）（1.322）は抗し難い＜時＞の力を意味している。その石塚を前にしてMichael老人は仕事の継承性と父子の愛の絆を語り、二人の間に厳粛な「契約」（"convenant"）（1.424）が交わされるのである。

そのようにして、父子の間に取り交わされたこの＜約束＞は、『虹の歌』（"The Rainbow"）の一節を想起させる。まさに、大空に懸かる＜虹＞はWordsworthにとっては神とノアとの間に取り交わされた、神と人との厳粛な契約を意味し、かつ、幼児と大人とを結ぶ想像の架け橋をも意味する、いわば「自然への崇敬」（"natural piety"）の象徴である。しかし、人間同士の間の＜約束＞は経験の世界には無力である。

『それでは、達者でな。
お前がここへ帰ってきたときにゃ、今、ここにないものを
見るだろうよ。これはお前とわしの間の約束としよう。
だが、お前の上にどんな運命が
起ころうとも、最後まで、わしはお前を愛し、
お前の思い出を墓場までもって行くことにしよう。』（傍点筆者）

("Now, fare thee well –
When thou return'st thou in this place wilt see
A work which is not here, a covenant
'Twill be between us – but, whatever fate
Befall thee, *I shall love thee to the last,*
*And bear thy memory with me to the grave*") (11. 422-427) (Italics Mine)

そのように、厳粛な約束を取り交わしたLukeは多くの村人に見送られて「秘境」("hidden valley") (1. 8) から「公道」("public way") (1. 436) に出てLondonへと向かうのである。しかしながら、Lukeは都会に出て始めの頃は、全ては順調にいっていたが、やがて勤めに緩みが出て、ついにふしだらな都会で悪の道に身をゆだね、不名誉と恥のため、ついにそこを追われ、隠れ家を外国に求め、行く方は定かでない。しかも、このことはわずか五行で語られ、それ以外のことはなにも語られていない。

しかし、『序曲』第七巻の「London滞在」("Residence of London") から考察すれば、Lukeが悪の道に走ったのは当然のことであった。何故なら、Wordsworthにおいては、都会では人間は相互に無関係で、かつ、「自然への崇敬」の念は絶たれている。したがって、このLondon滞在のなかで詩人が描く「悪夢 ("Nightmare") の世界は悲劇そのものである。そのような悪としての都市文化のなかでLukeが悪の道に走ったのは当然のことであったと思われるからである。

その後、Michaelは当然Lukeの失踪に苦悩しなかった訳ではない。しかし「愛の力に慰め」("a comfort in the strength of love") (1. 457) を得て、Michaelは何事もなかったかのように、毎日毎日Lukeとの間に交わされた「契約」、即ち、約束を果たすべく谷間へと降りて行くのである。その＜愛＞とは何事にも耐える＜力＞のことであるが、Wordsworthにおいては、それは人間が自然との交流を通して、つまり＜自然愛＞によって人間の心に愛が芽生え、その力によって人生苦に克ちうることを示しているのである。

## 注

(1) 五編の田園詩の引用は全てR. L. Brett and A. R. Jones, *Lyrieal Ballds* (Methuen & Co. Ltd, 1963) による。

(2) S. M. Parrish, *The Art of the Lyrieal Ballds* (Cambridge, Mass., 1973), p. 154.

(3) F. B. Pinion, *A Wordsworth Companion* (London, The Macmillan Press Ltd), p. 119

(4) Wordsworth, William, *The Poetical Works of William Wordsworth.* Ed. Ernest de Selincourt and Helen Darbishire. 5 vols. (Oxford : Clarendon Press 1944-49), II, 467.

(5) Parrish, P. 159.

(6) Wordsworth, William and Dorothy, *The Early Letters of William and Dorothy Wordsworth* 1787-1805. Ed Earnest de Selincourt (Oxford : At the Clarendon Press, 1935), p. 322.

(7) *Ibid.*, pp. 313-314.